信長包囲網の真相

天下人を震え上がらせた武将たち

渡邊大門

朝倉・浅井
義昭
武田
毛利
上杉
本願寺（ほか）

——最新研究——

なぜ、彼らは信長を裏切ったのか？

同時多発的に敵対した武将たちの視点から描き出す信長最大の危機。

信長包囲網の真相

天下人を震え上がらせた武将たち

渡邊大門

星海社

388

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

天正十年（一五八二）六月二日、明智光秀の急襲を受けた織田信長は、本能寺において自刃した。あまりにも劇的な最期だったが、もしこの事件が起こらなければ、信長は真の意味で全国統一を成し遂げたと考えられる。いずれにしても、信長の歩みは決して順風満帆ではなく、その生涯は次々と現れる敵との戦いに忙殺されたと言ってよい。本書が扱う「信長包囲網」は、その象徴である。

一般的に信長は、革新的な軍事力と政治力をもって戦国の強敵を次々と打ち破った英雄として語られる。だが、実際の信長は、常に危機と隣り合わせであったことがわかる。本願寺との抗争は十年に及び、武田氏との対立も一朝一夕に決着したわけではない。浅井・朝倉両氏の挟撃に遭った金ヶ崎の撤退戦は、信長の生涯でも屈指の危機であった。さらに、信長配下の松永久秀、波多野秀治、荒木村重、別所長治らが次々と離反したため、信長はその都度、戦線の立て直しを迫られた。

こうした状況を生み出した中心人物が、足利義昭である。義昭は信長によって将軍職に就いたが、やがて信長と対立し、諸大名に「信長を討て」と檄を飛ばした。義昭の呼びかけに応じたのは、浅井・朝倉両氏、本願寺、毛利輝元、武田信玄などの有力な戦国大名である。これらの勢力が連携し、信長を包囲する構図が「信長包囲網」であった。

ここで重要なのは、彼らが「なぜ信長に敵対したのか」という点である。従来では、反信長勢力は「旧勢力」「保守勢力」「時代遅れの大名」として描かれがちであった。だが、彼らは決して無謀な戦いを挑んだわけではなく、合理的な判断のもとに信長と対峙した。戦国大名が勝ち目のない戦いに身を投じるような愚行は、基本的に行わない。彼らが信長に反旗を翻したのは、「勝てる」という確信があったからである。

本書は、この「合理性」に光を当てることを目的としている。信長包囲網を単なる事件の羅列として扱うのではなく、各大名がどのような政治的・軍事的背景を抱え、どのような判断のもとに信長と対立したのかを個別に検討する。浅井長政は、なぜ信長を裏切ったのか。足利義昭は、どのような構想を描いていたのか。松永久秀はなぜ二度も許され、そして最終的に反旗を翻したのか。荒木村重はなぜ有岡城に籠り、一族を皆殺しにされる結末を迎えたのか。別所長治は、なぜ三木城での長期籠城を選んだのか。武田勝頼は、なぜ

家臣団の離反を止められなかったのか。

これらの問いに答えるためには、従来の「信長中心史観」から一歩離れ、反信長勢力の視点に立つ必要がある。信長の行動を基準にして他者を評価するのではなく、各大名が置かれた状況や領国の事情、外交関係、家中の力学などを踏まえ、再検討することが求められる。本書では従来説の再検討や新たな解釈を提示しながら、信長包囲網の実像に迫る。

本書の特徴としては、時系列ではなく「大名別」に章を構成した点が挙げられる。信長包囲網は複数の勢力が同時多発的に動いた複雑な現象であり、時系列で追うだけでは全体像が見えにくい。そこで本書では、各大名の行動を独立して分析し、最後にそれらを総合することで、包囲網の構造とダイナミズムを明らかにする構成を採用した。

信長包囲網の形成は、信長の生涯における最大の危機であると同時に、戦国時代の権力構造が大きく転換した契機でもあった。本書を通じて、信長がいかにして包囲網を突破し、天下取りへと歩みを進めたのか、そして反信長勢力がどのような思惑と合理性をもって行動したのかを、読者の皆様に感じ取っていただければ幸いである。

目次

はじめに　3

序章　信長包囲網とは何だったのか――形成・拡大・崩壊のダイナミズム　9

第一章　朝倉義景と浅井長政――〝裏切り〟の実像と姉川の戦い　23

第二章　足利義昭――将軍が選んだ「反信長」の合理性　57

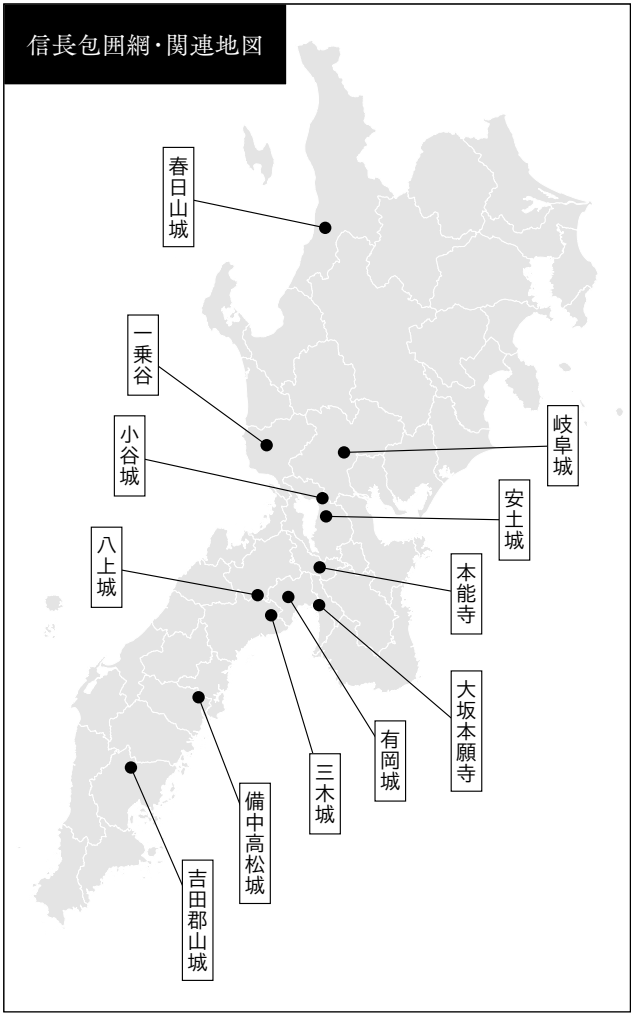
第三章　松永久秀――二度の赦免と最終的な決断の背景　87

第四章　波多野秀治――八上城の攻防と光秀の実像　113

第五章 荒木村重――有岡城の籠城戦と一族皆殺しの真相 141
第六章 別所長治――三木合戦と〝長治の選択〟をどう読むか 177
第七章 武田勝頼――離反した家臣団と武田氏滅亡の構造 203
終章 滅亡を免れた上杉、毛利、本願寺――本能寺の変と信長の最期 237
主要参考文献（全体を通して参考にしたもの） 265
おわりに 266

図版／ジェオ

信長包囲網・関連地図



序章

信長包囲網とは何だったのか

――形成・拡大・崩壊のダイナミズム

序章では信長包囲網の形成から消滅に至る経緯について、時系列で簡潔に押さえることにしたい。信長がいかに敵対勢力と戦い続けたか、理解いただけるはずである。

織田信長の上洛と反信長勢力

すべては、永禄十一年（一五六八）十月に織田信長が足利義昭を推戴し、上洛したことにはじまる。その目的は室町幕府の再興、および足利義昭を征夷大将軍にすることだった。信長は行く手を阻む南近江の六角承禎（義賢）・義治父子を撃破すると、そのまま京都を目指した。入京の際、三好三人衆（三好長逸・三好宗渭・石成友通）が阻もうとしたが、信長の勢いを止めることはできなかった。こうして信長は、義昭とともに悲願の上洛を果たしたのである。

同年十月、足利義昭は征夷大将軍に就任し、室町幕府を再興する念願を果たしたが、しばらくして信長は居城のある岐阜（岐阜市）に戻った。二人は相補いながら、政権運営を行ったといわれている。これを二重政権という。当初、二人の関係は良好だったが、信長の心は少しずつ義昭から離れて行った。信長は幕府を再興することにより、畿内秩序の回復と安定を目論んだ。とりわけ信長は朝廷への奉仕に心を砕き、御所の修繕費用を負担す

るなどした。幕府を再興した目的は、この点にあったのである。

一方の義昭は、朝廷への奉仕を行わず、戦乱による改元の要請にも応じなかった。加えて、各地の大名と連絡を取り合うなどしたので、信長は快く思わなかったのである。その間、信長は永禄十二年（一五六九）一月に「殿中掟九ヵ条」および「追加七ヵ条」を定めたり、永禄十三年（一五七〇）一月に「五ヵ条の条書」で義昭を非難したりしたが、まったく効果がなかった。

信長の上洛後、敵対したのが朝倉義景である。同年四月、信長は義景を討つべく、越前国に兵を送り込んだ。当初、織田方は朝倉方の諸城を次々と落としたが、やがて味方だった浅井（あざい）長政の裏切りを知った。長政は信長の妹のお市を妻に迎えていたが、突如として朝倉方に寝返ったのである。窮地に陥った織田方は、這う這うの体で越前から撤退した（金ヶ崎の退き口）。

同年九月、今度は大坂本願寺を拠点とする本願寺（大阪市）が信長に兵を挙げた。これまで、先に攻撃を仕掛けたのは信長だったといわれていたが、実際は逆だった。先に攻撃を仕掛けたのは、本願寺だったことが明らかにされている。以降、信長と本願寺は、十年にわたる抗争を繰り広げたのである。

挙兵する反信長勢力

信長に兵を挙げたのは、浅井・朝倉両氏や本願寺だけに止まらなかった。

元亀二年（一五七一）五月、信長は本願寺の動きに呼応した伊勢長島（三重県桑名市）一向一揆を討伐しようとしたが、攻略に失敗し多くの兵を失った。同年九月、浅井・朝倉両氏に結託した比叡山延暦寺（滋賀県大津市）を焼き討ちにした。信長は仏教勢力を敵視したように言われているが、それは誤りである。彼らが信長に兵を挙げたので、これを討つべく交戦に至ったに過ぎなかった。

同じ頃、甲斐国の武田信玄は駿河国を併呑（へいどん）し、上杉、北条、徳川の各氏と敵対していた。元亀三年（一五七二）十月、再び北条氏と和睦した信玄は、西上の途につき徳川領国に攻め込んだ。それを知らなかった信長は、武田氏と上杉氏の間を取り持とうとしたが、一方の信玄は浅井・朝倉両氏に対し、信長への対抗を依頼した。突然の攻撃だったので、家康は信玄に大苦戦を強いられたのである。

同年十二月、家康と信長の連合軍は三方ヶ原（みかたがはら）（静岡県浜松市）の戦いで大敗を喫した。この敗戦により、信長は苦境に立たされたのである。同じ頃、信長は義昭に「異見十七ヵ条」を送り、手厳しく政治姿勢などを非難した。義昭は信長からの非難に加え、三方ヶ原の戦

いで勝利した信玄の協力を得られそうだったので、一気に反信長へと舵を切った。

元亀四年（一五七三）、信玄は三河国に侵攻し、二月には徳川方の野田城（愛知県新城市）を落とした。信長は本拠の岐阜を発つと、義昭と和睦を結ぶべく上洛した。当初、義昭は信長との和睦を拒んだが、正親町（おおぎまち）天皇の命もあったので、四月になって受け入れた。ところが、義昭がもっとも頼みとした信玄は、四月十二日に亡くなったので、その後の目算が大きく狂った。義昭は、信玄の死を知らなかったのである。

同年七月、義昭は槇島（まきしま）城（京都府宇治市）に拠って、信長に兵を挙げたが敗北した。義昭は各地を転々としたが、天正四年（一五七六）二月に毛利輝元を頼り、備後国鞆（とも）（広島県福山市）に移った。毛利氏を後ろ盾とした義昭は、本願寺や諸国の大名と連携し、「信長包囲網」を形成したのである。

反信長勢力との死闘

天正元年（一五七三）八月、信長は約三万の兵を率いて、浅井長政と雌雄を決すべく北近江に出陣し、小谷（おだに）城（滋賀県長浜市）を包囲した。朝倉義景は、ただちに浅井氏に援軍を送り込んだが敗北し、越前国に逃走した。逆に、織田方が越前国に攻め込んできたのであ

る。義景は一族や家臣の裏切りもあり、一乗谷（福井市）から賢松寺（福井県大野市）に脱出したが、敗北を悟り自刃して果てたのである。

一方で、秀吉方は小谷城の京極丸を落とし、浅井久政（長政の父）を自害に追い込んだ。その直後、小谷城も落城し、長政もまた自刃した。こうして信長は、長年抗争を繰り広げていた浅井・朝倉両氏を滅ぼしたのである。

同年九月、信長は約五万の軍勢を率い、伊勢長島一向一揆を討つべく出陣したが、滅亡に追い込むまでには至らなかった。翌天正二年（一五七四）七月、再び信長は伊勢長島に出陣すると、激しい抵抗に遭ったものの、一揆勢に勝利した。信長は立て籠った一揆勢約二万を攻囲し、徹底的に殺戮したのである。

天正三年（一五七五）五月、信長は家康とともに設楽原（愛知県新城市）へ出陣し、武田勝頼との戦いに挑んだ（長篠の戦い）。結果的に信長・家康連合軍が勝利したが、従来から言われるように「三千丁の鉄砲を千ずつ代わる代わる撃った」とか、「戦国最強の武田騎馬隊」が存在したなどの説は、今となっては否定されている。同時に、武田氏が敗戦で一気に威勢が衰えたとは言えず、滅亡は七年後だったことに注意すべきだろう。

天正四年（一五七六）一月、それまで信長と良好な関係にあった、八上城（兵庫県丹波篠

山市）主の波多野秀治が謀反を起こした。秀治の討伐を命じられたのは、明智光秀だった。同じ頃、本願寺が再び挙兵したので、信長は窮地に陥ったのである。このとき本願寺に与同したのは、越後国の上杉謙信だった。

天正五年（一五七七）二・三月、信長は雑賀衆を討つべく紀伊国に攻め込み、降伏に追い込んだ。同年八月、松永久秀が信貴山城（奈良県平群町）に籠城し、信長に反旗を翻した。信長は翻意を促すべく使者を送り込んだが、これを拒否された。信長は子の信忠を送り込むと、十月に信貴山城は落城し、久秀は自害して果てたのである。続けて信長は、羽柴秀吉に中国計略（毛利氏の征伐）を命じた。信長の命を受けた秀吉は、ただちに毛利方の上月城（兵庫県佐用町）を落としたのである。

天正六年（一五七八）二月、三木城（兵庫県三木市）主の別所長治が謀反を起こした（三木合戦）。この戦いは、約二年に及んだ。同年十月、この動きに呼応するがごとく、有岡城（同伊丹市）主の荒木村重が兵を挙げた（有岡城の戦い）。信長は村重に謀反を思い止まるよう説得を試みたが、失敗に終わった。以降、反信長の動きが活発化し、信長はその対応に追われたのである。

敗れた反信長勢力

反信長勢力は毛利輝元、足利義昭、本願寺と連携し、次々と信長に戦いを挑んだが、結果は無残なものだった。

天正七年（一五七九）六月、光秀は八上城を落とした。城主の波多野秀治は捕らえられ、安土城（滋賀県近江八幡市）下で磔刑に処された。村重も当初こそは善戦したが、同年九月に有岡城から尼崎城（兵庫県尼崎市）に移った。しかし、しばらくして有岡城は落城し、村重の妻子らが皆殺しにされた。村重自身は毛利氏を頼って、落ち延びたのである。

天正八年（一五八〇）一月、秀吉は三木城を開城・降伏させた。城主の別所長治は、城兵を助ける条件と引き換えにして、自身と一族が自害したのである。この直後の同年閏三月、本願寺も降伏し、大坂本願寺をあとにしたのである。この時点で、反信長勢力の多くは降参するか滅ぼされ、信長は天下取りに邁進したのである。残る強敵は、武田氏上杉氏、長宗我部氏くらいだったといえよう。

天正九年（一五八一）一月、信長は敵対する姿勢を見せた高野山（和歌山県高野町）の討伐に動き、捕らえた高野聖を処刑するなどした。高野山は信長に徹底抗戦の構えを見せたので、戦いは長期化するように見えた。ところが、信長は武田氏征伐に専念することにし

たので、いったん高野山攻めは取り止めになったのである。同年には織田方が越中国に攻め込み、その大半を制圧したため、上杉景勝との対決も控えていた。

同年六月、秀吉は毛利方の吉川経家（きっかわつねいえ）が籠る鳥取城（鳥取市）への攻撃を開始した。秀吉は鳥取城を兵糧攻めにしたので、たちまち城内から餓死者が続出した。同年十月、勝ち目がないと判断した経家は、城兵の助命を条件として開城・降伏し、自らは自害して果てたのである。こうして秀吉は、因幡国の制圧に成功した。

天正十年（一五八二）二月、武田方の親類衆の木曾義昌は、にわかに織田方に寝返った。これにより、信長は本格的に武田氏征伐に乗り出し、子の信忠らの軍勢が一斉に甲斐に侵攻した。迎え撃つ武田方は、次々と敗北もしくは降伏し、もはや抵抗する術（すべ）がなかった。同年三月、勝頼は田野（山梨県甲州市）で妻子とともに自害し、ここに戦国大名としての武田氏は滅亡したのである。

本能寺の変とその後

数々の敵対勢力を討った信長にとって、残る敵は越後の上杉氏、土佐の長宗我部氏となった。あからさまに敵対してなかったが、北条氏、島津氏といった大名は健在だった。

天正十年（一五八二）になると、信長は土佐国の長宗我部元親（もとちか）を討つべく準備を進めた。そもそも、信長は元親と良好な関係にあり、長宗我部氏の四国統一と奪い取った領土の支配を認めていた（切り取り自由）。のちに、信長は前言を翻（ひるがえ）し、長宗我部氏の切り取り自由を認めない旨を通告したので、両者の関係は悪化したのである。同年五月、信長の命を受けた子の信孝は、諸将らとともに大坂に兵を進め、四国に攻め込むべく準備を進めた。

同年四月、朝廷は信長に対し、太政大臣・関白・征夷大将軍のいずれかに任じたいと申し入れた。翌月、信長は使者を送り返答したが、どの職を望んだのか、あるいはすべて拒否したのか不明である。同年五月二十九日、信長はわずかな手勢を率いて上洛し、本能寺（京都市）に滞在した。京都では、公家衆が歓待したという。

一方、同年五月、すでに播磨国などを攻略した秀吉は、毛利方の清水宗治が籠る備中高松城（岡山市）を水攻めにした。秀吉は戦いを優位に進め、あとは宗治がいつ降参するかを待つだけだった。水攻めの最中の同年六月二日、明智光秀が本能寺を強襲すると、滞在中だった信長は自害に追い込まれたのである。信長の死の一報は、ただちに秀吉のもとにもたらされた。

秀吉は毛利方との和睦を取りまとめ、ただちに上洛すると（中国大返し）、同年六月十三

日の山崎の戦いで光秀に勝利した。敗走した光秀は、本拠の坂本城（滋賀県大津市）を目指す途中で土民に討たれた。光秀の死後、清須会議が催され、秀吉ら重臣が三法師（のちの秀信／信忠の子）を支え、織田政権を運営していくことで一致した。一連の流れの中で、光秀を討った軍功第一の秀吉は、主導権を掌握したのである。信長の死によって、「信長包囲網」は消滅したといえよう。

まとめ

以上、本章では信長包囲網の形成から崩壊、そして本能寺の変に至るまでの流れを時系列に沿って概観してきた。改めて振り返ると、「信長包囲網」とは単なる一時的な同盟関係ではなく、信長の勢力拡大に対抗しようとする諸勢力の動きが連鎖的に結びつき、時に緩やかに、時に強固に形成されたネットワークであったことが理解できる。

注目すべきは、信長包囲網が一度に完成したものではなく、段階的に形成されていった点である。信長の上洛に始まり、浅井・朝倉両氏の離反や本願寺の挙兵、さらには武田信玄や足利義昭、毛利氏などが加わることで、反信長勢力は次第に広がりを見せた。これらの勢力は、必ずしも当初から緊密に連携していたわけではなかった。信長という共通の敵

を前にして利害を共有し、結果として包囲網の様相を呈するに至ったといえよう。したがって、信長包囲網とは固定的な組織ではなく、情勢に応じて変化し続けた動的な枠組みとして理解する必要がある。

一方で、包囲網の崩壊過程にもまた注目すべき点が多い。浅井・朝倉両氏の滅亡、伊勢長島一向一揆の壊滅、長篠の戦いを経た武田氏の衰退、さらには別所長治や荒木村重らの敗北など、反信長勢力は個別に打撃を受け、次第にその連携力を失っていった。信長は各地の敵を同時に相手取るのではなく、情勢を見極めながら順次対処し、個別撃破を重ねることで包囲網を解体していったのである。ここには、信長の軍事的力量のみならず、政治的判断力や情報収集力が大きく関わっていたといえよう。

さらに見逃せないのは、信長包囲網の背後にあった多様な動機である。足利義昭にとっては将軍権威の回復が、毛利氏や武田氏にとっては勢力均衡の維持が、また本願寺や一向一揆にとっては信仰と自治の防衛が、それぞれ戦いの動機となっていた。すなわち、信長包囲網とは単なる「反信長」という一点で結びついた存在ではなく、各勢力がそれぞれの事情を抱えながら形成した複合的な対抗構造だったのである。この点を見落とすならば、信長包囲網の実像を正確に理解することは難しい。

そして最終的に、信長包囲網は本能寺の変という予期せぬ事件によって終焉を迎えた。天下統一へと歩みを進めていた信長であったが、その死によって包囲網そのものが消滅したとみなされるのは、包囲網があくまで「信長」という個人を相手として成立したことを意味しよう。信長という強力な指導者が存在したからこそ、それに対抗する勢力もまた結集したのであり、その中心が失われたとき、包囲網は歴史的役割を終えたのである。

本書では、この序章で示した全体像を踏まえつつ、次章以降において個々の勢力や事件に焦点を当て、それぞれの背景や実態をより詳細に検討する。信長包囲網はしばしば単純化され、「信長対反信長勢力」という図式で語られがちであるが、実際には多様な思惑が交錯する複雑な歴史現象だったことが明らかである。以下、その複雑さとダイナミズムを具体的に明らかにすることとしたい。

第一章

朝倉義景と浅井長政

〝裏切り〟の実像と姉川の戦い

浅井長政と織田信長

浅井氏は北近江を支配し、小谷城（滋賀県長浜市）を本拠とした。浅井長政が久政の子として誕生したのは、天文十四年（一五四五）のことである。当初、浅井氏は六角承禎（義賢）に従っていた。永禄二年（一五五九）一月、十五歳になった長政は元服に際し、その偏諱を授けられて「賢政」と名乗った（以下、「長政」で統一）。同じ頃、長政は六角氏配下の平井定武の娘を妻に迎えたという。これは、浅井氏と六角氏の関係を強固にするための政略結婚だった。

同年四月頃、長政は早々に妻と離婚し、平井氏のもとに返した。これは、浅井氏と六角氏の関係が破綻したことを意味するといえよう。翌永禄三年（一五六〇）八月、承禎は肥田城（滋賀県彦根市）を攻撃した。肥田城主の高野瀬秀隆は、もともと六角氏に仕えていたが、浅井氏に寝返ったのである。長政は高野瀬氏を救援すべく出陣すると、六角方を相手に勝利を収め、見事に初陣を飾った。

同年十月頃、久政は隠退して、長政に家督を譲った。『江濃記』によると、家臣たちが合議のうえで久政を隠退に追い込んだという。それは、六角氏に対する備えでもあった。その後、久政は小谷城に移ったのである。この時点で、久政の年齢は三十五歳という若さだ

った。しかし、その後も長政と久政が連署して文書を発給しているので、決して二人の関係が破綻したわけではない。当時、当主が早い段階で子に家督を譲り、後見的な立場になることがあったので、その可能性も捨てきれないだろう。

永禄三年（一五六〇）五月、織田信長は桶狭間の戦いで今川義元を破り、勢いに乗っていた。一方で、弘治二年（一五五六）四月、信長は義父・斎藤道三が子の義龍（よしたつ）に討たれたので（長良川の戦い）、斎藤氏との関係が悪化していった。そこで、信長は斎藤氏を牽制する意味もあり、北近江に勢力基盤を置く浅井氏と誼（よしみ）を通じようとした。信長は長政と同盟を結ぶに際して、妹のお市を妻として送り込んだ。政略結婚である。

長政とお市の方が結婚した時期については、諸説あり一致しない。もっとも古いものは永禄二年（一五五九）で、もっとも新しいものは永禄十一年（一五六八）である。信長は浅井氏と同盟を結ぶことで、美濃攻略を有利に進め、同時に上洛する経路を確保しようと考えたのである。お市を妻に迎えた長政は、信長の偏諱を与えられ、「賢政」から「長政」に改名したといわれるが、これを疑問視する向きもある。

次世代による次世代のための

武器としての教養
星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、**みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。**

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。**思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。**著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？　それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、**戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。**知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための〝武器〟としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていきたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長　柿内芳文

SEIKAISHA SHINSHO